

『聊齋志異』における狐との異類婚姻譚

皆 川 恵 理

はじめに

『聊齋志異』には度々、妖怪や鬼や神仙の類、狐などが登場する。『聊齋志異』は志怪小説に分類されるものであるから、人外の異類が多数登場するのである。特に、狐や幽霊の女などが、人間の男と夫婦になるという説話が多数収録されている。このように異類との婚姻のものを異類婚姻譚という。

『聊齋志異』においては、異類の正体が狐であることが多い。狐は美女に化け、人間の男と夫婦になる。そこで描かれる狐は、夫を愛しよく仕え、時には狐の持つ超能力で夫やその周りの人々を助ける。それは人間の妻以上に素晴らしいものであり、まさに理想の妻なのである。しかし、それならばなぜ、理想の妻の姿が人間ではなく、あえて狐として描かれるのであろうか。その正体が狐であれば、そうと知らなければ女たちの姿は人間そのものである。狐との異類婚姻である必要性について論じていくことにする。

一 『聊齋志異』について

『聊齋志異』は清代の蒲松齡の作である。蒲松齡は六四〇年、淄

川（現在の山東淄博市淄川区）に生まれ、一七一五年に七五歳で亡くなっている。彼はその生涯の中で何度も科擧を受験した。一九歳の時に童子試で、県・府・道それぞれ主席合格し秀才となった。だが、そののちは何度も不合格を繰り返し返し、晩年に貢生⁽²⁾となるにとどまり、ついに科擧に及第することはなかった。しかし、家塾の教師として官僚の家を転々とするなかで畢氏と出会う。畢氏の家は豊富な蔵書があり、また畢氏は蒲松齡の才能を称賛したために、蒲松齡は創作活動に大変有効な地を得た。そのこともあって、彼は実にたくさんの著作を残したのである。

その蒲松齡が記した『聊齋志異』は、もちろん彼の著作であるが、すべての説話を蒲松齡が創作したわけではない。蒲松齡の創作した説話も含まれるであろうが、その多くは当時世間に流布していた説話をまとめたものである。

さて、その『聊齋志異』の性格であるが、『齊魯聞人』⁽³⁾では以下のような記述がある。

『聊齋志異』は、男女の恋愛・婚姻譚が多く描かれている。それらは、深く人を感動させ、芸術としての完成度も高い。人と

雌の狐や幽霊や妖怪との生死を超えた愛情の話が多く、その構想は奇特で、極めて人情に富んでいる。この篇章は、女性の徳や才能を賛美し、男女の自主的な婚姻を褒め称えている。これらの男女は、封建的倫理的道德的な束縛を受けず、礼儀や道德を蔑視し、一種の健全で合理的な愛情のある生活に憧れをもっている。したがって伝統的な礼儀や道德に対して大胆な攻撃を進めたもので、強烈な民主的様相を現出している。⁽⁴⁾

まず注目すべき点は、「描写男女婚恋的篇章」と言い切っている点である。ただ不思議だなというだけでなく、それは「婚恋」の説話であるという。「婚恋」とは結婚と恋愛を指すのであろうが、後の箇所で「歌頌男女自媒自主的婚姻」とあることから、当人同士の自由婚姻、あるいは、いわゆる恋愛結婚を指すものであるとも読み取ることができる。さらに、その結婚生活は、人間同士のものだけでなく、妖怪や動物などとの異類婚姻も含める。『聊斎志異』全体が妖怪や鬼や狐などの人外譚も多いので、それらが登場する恋愛譚、婚姻譚が登場するのも当たり前なのである。

二 狐との異類婚姻譚

狐が美女に化けて、人間の男と夫婦になるというモチーフは『聊斎志異』が初出ではない。そもそも狐という動物は、ただの動物としてではなく、神の使いとして、あるいは妖術を使う獣として古くから描かれてきた。それが美女に化け、人間の男と云々という説話は、まず晋代の『搜神記』巻一に「阿紫」がある。

「阿紫」というのは狐の名前である。阿紫は王靈孝という男を誘

惑して生気を吸い取ってしまう。この説話では、「狐」と夫婦になること（あるいは狐と交接すること）は、人間にとって害あるものとして描かれている。『搜神記』が書かれた当時は、人間を誘惑する動物は魔物であると考えられていた。「阿紫」本文でも、「怪遂避去」とある。人間にとってそのような動物は、単なる獣というよりは「怪」であり、魔物や妖怪の類であった。この説話の孝のように交わりと実害が出る以上、人間を誘惑する動物というものは、人間にとって悪いイメージが付くことは当然であろう。

このように、人間を誘惑する動物、またはそのような動物と交わることは悪であつた。そのために、人間に化けていた動物の正体が明らかになると退治されるのだし、退治されるべきものであつた。

次に、唐代伝奇から「任氏伝」を挙げる。「任氏伝」は唐代伝奇の中でも、狐との異類婚姻譚の中でも、大変重要なものである。それというのも、この物語が単なる異類婚姻譚にとどまらず、所々で狐妻と男とが互いに思いやり愛し合う様子が描かれているためである。いうなれば「任氏伝」は「恋愛小説」の先駆けであつた。

「任氏伝」で注目すべき点は、男（鄭六）が、契りを交わした女が狐と知っても、それを問題視しないことである。また任氏のほうも、鄭の友人である崑に襲われかけた際に、鄭に操立てる様子が描かれている。このほかにも、任氏がよく鄭に仕える姿や、獬犬にのみ殺された時の鄭の悲しみやなど、二人の愛情が感じられる場面はいくつもある。そして、作中で任氏は狐だと断定しているにも関わらず、獣らしい描写は全くない。むしろ人間の女のように生き生きと描かれているのである。『搜神記』の「阿紫」に比べると、狐が人間の世界に溶け込んでおり、明らかに人間とのかかわりが親密

になっていることがわかる。そのために「任氏伝」は、狐の話というイメージはとても薄く、恋愛小説であるというイメージのほうがはるかに大きいのである。これについて、『中国古典小説選⁵⁾』「任氏伝」の解説には以下の記述がある。

「任氏は女妖なり」と書き出しから人間でないことを明かされた任氏は、人間と変わらないどころか、その異能と婦徳によって人間を超えた理想存在として形象化されている。(中略)だがそれ以上に印象的なのは、任氏の堅固な貞節である。夫、鄭六の友人である貴人の韋室が、任氏の美貌に迷って迫る場面の精采に富む活写はともかく、彼女は韋室を見事に説得し、それによって韋室と、男女の仲、身分の相違を超えた関係を実現する。

そして『聊齋志異』へと狐との異類婚姻譚のモチーフが受け継がれていく。

「嬌娜」という説話がある。この説話のメインテーマは、狐である嬌娜の超能力や、狐の一家との交流であり、先述の「任氏伝」のように恋愛がその核をなすようなものではない。しかし、主人公の孔雪笠は、狐の一家と親しむ中で、嬌娜・香奴・松娘という三人の女(もちろん狐である)に惹かれ、最終的には松娘と夫婦となる。

説話の中心にはならずとも、この「嬌娜」も異類婚姻譚と見ていいだろう。一つの説話の中で三人もの女に思いを寄せるのは、一見やや色好みで惚れっぽいという印象を受けてしまう。しかし、それは言い換えるならば、それだけ三人が魅力的であつたということに

なる。狐は美女に化けるものであるので、当然容貌は申し分ない。それどころか、仙界のものであるかのような美しさである。またそれだけでなく、女たちはそれぞれ人離れた力を持っている。香奴ならば琵琶の才であるし、嬌娜ならば病気を治癒する力、松娘は少々地味ではあるが、理想的な妻であることと云っていいだろう。嬌娜の能力は人間には決してできることではないが、香奴と松娘の能力は、人間でもある程度は可能なものである。しかし、容貌がそうであるように、それらの能力が飛びぬけている点は十分に魅力的である。

ほかに「青鳳」という説話がある。青鳳と去病は出会いお互いに惹かれるものの、青鳳の叔父がそれを許さないために離ればなれになってしまふ。しかし偶然にも二人は再会し、今度こそ夫婦になつて幸せに暮らす。この説話では、作中で二人の動作や会話からお互いを想っていることが顕著に読み取れる。例えば去病は、青鳳の部屋へ行くが会えず、残り香の中で一晚を過ごし、青鳳は叔父に止められているにもかかわらず去病の誘いに乗る。実は去病は、青鳳と離れ離れになり再会するまで彼女が狐であることを知らなかった。再開の際に狐と知るが、そんなことはどうでもよく、ただ再び会えたことに歓喜する様子が描かれる。

三 日本における狐との異類婚姻譚

異類婚姻譚は日本にも存在する。昔話の「鶴の恩返し」(「鶴女房」系の説話)は有名である。他にも狐はもちろんのこと、蛙・蛇・魚など、様々な動物との異類婚姻譚が存在する。これらの説話はストーリーに次のような共通性がある。

貧しい男がいた。災難に遭った動物を助ける。すると女が家にやってきて嫁にしてくれという。男が女の正体を見て知ってしまった、知られてしまった女は去る。

動物女房の説話ではこのストーリーはよく見られるが、女の正体が動物ではなく神仙の者であったりすると、これには合致しなくなる。ただし、最終的に男女が別れてしまうところは共通している。これらは異類が女である場合のものであるが、日本の昔話の中には異類が男である婿入り譚も存在する。異類男が人間の男を助けた見返りに娘を要求する。決まって三番目の女が異類のもとへ嫁ぐが、最終的には異類男を殺して家に帰って来る、という展開である。異類が男であるというのは本論の趣旨とややずれるので多くは論じないが、異類が男であれ女であれ、日本の異類婚姻譚に共通して言えることは、最終的に男女が離別することである。

『日本霊異記』の「狐為妻令生子縁第二」に狐との異類婚姻譚がある。犬の存在によって正体が狐だと知られると、妻は家を出た。しかし夫が「毎に來りて相寐よ⁶」と言ったことで、妻は家にやってきては泊って行くようになる。これは、男女の離別が定着している日本の異類婚姻譚の中では、まれな例であるといえよう。しかし、犬によって女の正体が露見したことで、夫婦間で変化が起こったことは確かである。それが、ともに同じ家に暮らさなくなったことである。それまでは子供もあったのだし、男女は同じ家に住んでいた。しかし正体露見によって、女は家を出て男の家にやって来て泊っていくようになる。これは一概に別れとはいえないが、やはりそれまでの夫婦より多少物理的な距離が開いたと考えられるだろう。

また、『今昔物語集』にも、「備中国加陽良藤為狐夫得観音助語第十七」という狐との異類婚姻譚がある。良藤は狐女とそうとは知らず夫婦になり、子供もできる。夫婦仲も「弥ヨ契リ深ク⁷」なり、「様々思フ様也」という心地にまで到達した。本当に円満な夫婦であった。しかし観音の化身の登場で、良藤は元の家に戻され、それまで一緒に暮らしていた妻や子供と二度と会うことはなかった。まさに別れである。さらには、「漸ク本ノ心ニ成テ、何ニ恥カシク奇異也ケム」という記述を見ると、良藤自身の心情ではないにしろ、周りからこのように思われていたのならば、良藤本人も奇異の目で見られることを恥ずかしいと思っていたのだらう。それならば、良藤に女への未練はないことになる。仲睦まじかった妻に未練もないとは、人間と異類との間はとても遠いものである、という認識があったということになるのではないだろうか。

四 日中比較

ここまでで、日中の異類婚姻譚を見てきた。美女に化けた狐と男との異類婚姻譚が、日中でどのように共通しているか、あるいは相違があるか比較していくにあたって、大きく「①夫婦間の愛情」「②夫婦の結末」の二つの点に着目して論じることにする。

①の夫婦間の愛情については、さらに状況を分けて考えなければならぬ。それは、女の正体が狐と知っている時と、そうとは知らず人間だと思っている時があるためである。日中両方の異類婚姻譚とも、女の正体を男が知らない場合は当然のことながら、夫婦仲は睦まじく、愛情豊かな生活がうかがい知れる。化けている狐は、自分の正体が狐だとは当然知っているが、男は相手が人間だと思って

いる。それならば、二の足を踏む必要はまったくない。男にしてみれば思いがけず美しい女を妻にできて喜ぶところだろう。女の方も自分は狐、相手は人間だと分かった上で誘惑したり、親しく接したりするのだから、そこに好意がないはずもない。

では、女の正体が狐だと知れたらどうなるか。繰り返しになるが、中国の説話においても日本の説話においても、正体露見のモチーフがある。それは犬によるものであることが圧倒的に多いのだが、必ずしもそうではなく、「任氏伝」のように人づてに聞いたり、「嬌娜」のように狐から告白されたり、「備中国加陽良藤為狐夫得観音助語第十七」のようにその姿を見ろといったパターンもある。特に、人間が異類の正体を見せしめというものは、日本に多く広まった形である。狐には犬、とペアになりがちであるが、そのほかの異類の場合は犬に相当するモチーフを持つものは少ないためである。いずれにせよ、狐の正体が露見しなければ、単なる人間同士の恋愛譚になるので、異類婚姻譚としては正体露見が必須事項になるのである。それでは、「阿紫」「任氏伝」「嬌娜」「青鳳」「狐為妻令生子縁第二」「備中国加陽良藤為狐夫得観音助語第十七」について、正体が露見した後の夫婦間の様子をまとめることにする。なお、それぞれのタイトルを、便宜上次のように省略して表記する。

【阿紫】 【任氏】 【嬌娜】 【青鳳】 【靈異】 【今昔】 (※23)

まず、女の正体が狐だということに全く頓着しないものをa群とする。a群には【任氏】【嬌娜】【青鳳】が当てはまる。【任氏】では、一夜を過ごしたその翌朝には任氏が狐だと知ったが、鄭は「それが

なんだ」とますます思いを強めた。【嬌娜】では、女たちの一族が狐であると知れるのは物語の後半であり、それまでに深めた親交もある。一族を救ってくれとの願いにも、命がけで守るほどである。【嬌娜】は、男と女の一对一ではなく、男と狐の一族の話であるため、孔と松娘の実を抜き取って考えるのは難しい。しかし、命がけで一族を救ってやるということは、狐に対して否定的な感情を持たず、大変好意的であることを示している。【青鳳】では、一度離れ離れになってしまった青鳳に、再び出会えたことに、去病は歓喜した。狐の姿であったために、青鳳の正体を知ったわけだが、そのことには何も触れない。

次に、女の正体が狐だと知って愛情が薄れるものをb群とする。b群には、【阿紫】【今昔】が当てはまる。この二つの説話は内容的にも非常に似ているといえるだろう。女の家で過ごすことも、発見された時に正気を失っていることも共通している。どちらも、女の家で暮らしている時（女が狐だと知らずにいたとき）は、大変幸福なものであった。しかし、本来の人間の家に帰り正気を取り戻した後には、女に会いたいとか女の家に戻りたいとは思っていない。生気を奪われたこともあったために、狐に「化かされた」「被害に遭った」という思いの方が強いのであろう。

さらに【靈異】についてもまとめておく。【靈異】では、女が狐であることに、男は問題視していない。正体の露見した女が去ろうとする記述はないが、男は「毎に來りて相寐よ」と言う。「來りて」とは「外から」来るということである。狐だと分かっただけで暮らせない、日本の異類婚姻譚特有の別れがここにもある。しかし、この夫婦の愛情が薄れたかといえそうではない。先述の台詞から

男の思いははっきり読み取れるし、それを受けてたびたび訪れる女の方にも愛情があることがわかる。よって【靈異】についてはどちらにも含めないものとする。

では②に移る。ここでは、説話の結末ではなく、あくまで夫婦の結末を論じるものである。つまり、説話全体としてハッピーエンド・めでたしめでたしで締められていても、夫婦の関係だけを抜き出して考えた時、必ずしもハッピーエンドとは限らないということである。

②を論じるにあたって、①で整理した内容が大きくかわってくる。女の正体が露見したとき、変わらず愛情豊かであることと、愛情が薄れてしまうこととは、夫婦の結末に大きく影響するためである。まずは①での内容を簡単にまとめておく。

a 群（女の正体が狐だということに全く頓着しないもの）【任氏】

【嬌娜】【青鳳】

b 群（女の正体が狐だと知って愛情が薄れるもの）【阿紫】【今昔】
どちらともつかないもの【靈異】

a 群は、女の正体が狐であってもそれに頓着しないものであるから、女が狐であるという事実は夫婦仲の変動に関与しない。つまり、女が狐だという理由で、愛情が薄くなったり別れたりしないということを確認しておく。

では、a 群のそれぞれの説話について考察していく。

まずは【任氏】である。【任氏】の結末は、任氏が獵犬にかみ殺されたことによる死別である。鄭と任氏の問題でなく、第三者であ

る犬によって別れが生じている。次に【嬌娜】では、松娘が一族とは別れるが、孔について孔の家で暮らし続けた。一族が雷の災に遭うも、孔が助けてくれたため事なきを得ている。別れもなければ愛情の薄れもない。始終円満である。次に【青鳳】では、むしろ、夫婦になれるまでに障害があり、夫婦になってからはその反動のように円満である。

では、b 群に移る。b 群では、女の正体が明らかになった時点でまず愛情が薄れている。これはa 群とは逆に、夫婦別離の原因になりうるものである。

それではa 群同様にそれぞれの説話について考察していく。

まず【阿紫】では、孝は発見された時に正氣を失っていた。孝が阿紫は本当は狐なのだと理解したのは、正氣を取り戻してからだろう。それから孝は、阿紫のもとに帰る気はないし、帰りたいとも思っていない。そもそも阿紫の家から脱出した（発見された）時点で別れが生じている。そして復縁することはない。次に【今昔】である。【阿紫】と【今昔】のストーリー展開が類似していることは①でも述べた。②でも同様で、やはり【阿紫】と同じで夫婦は別離している。

そしてa 群b 群どちらともいえない【靈異】である。【靈異】はやはりどちらともいえない。正確には、正体露見以前は一緒に暮らしていたのに、露見後は女が通ってくる形に変化したことは、物理的（距離的）な別れと言える。しかし、女は通って来て泊って行く生活が続くということは、精神的には夫婦生活は円満なままなのである。

①と②を統合して言えることは、女が狐だということに頓着しな

いa群では、夫婦の結末は円満である。そのa群には中国の説話ばかりが偏っているという点は見逃しせない。簡単にいえば、中国の説話では、女の正体が明かされても、それは問題ではなく、夫婦間に支障が出ることはない。それならば、中国の説話でありながらb群に属する【阿紫】はどうなるか。【阿紫】は異類婚姻譚のなかでも初期のものである。本稿が『聊齋志異』を中心に考える以上、『搜神記』に収録される【阿紫】は、『任氏』や『聊齋志異』に繋がっていく前身の姿という位置づけになる。そのため、中心に据える『聊齋志異』の性格と異なることは、当たり前のことである。事実、今回取り上げなかった「嬰寧」や「義士」でも、男と狐妻は夫婦円満なまま説話は終わるのである。

対してb群には日本の説話が多い。今回取り上げたのが【今昔】と【靈異】だけであったのでそうとはみえないが、三であげた「女房」のパターンはすべてb群なのである。加藤耕義氏の「日本の昔話における正体露見」の結びには、「すべての場合に共通して正体露見が物語っていることの一つは、正体露見が人間と異界との関係をそのままに留めてはおかないということである」とある。一見夫婦生活が持続しているかのように見える【靈異】でも、露見以前となにも変わらない生活はできていない。日本の説話・昔話では、正体が露見することと異類が去ることは切り離せないのである。

正体露見を問題にしないか、正体露見で異類が去るかということが、日中の説話で大きく異なっている点である。

五 中国における婚姻形態と異類婚姻譚

『聊齋志異』の中で描かれる狐の振る舞いは、まさに理想の妻で

ある。しかし、なぜ理想の妻が人間ではなく、あえて狐として描かれるのだろうか。その手掛かりとして、人間世界での婚姻形態について考察する。

中国の伝統的な婚姻制度は「父母の命、媒氏の言」という言葉に表される。どちらが欠けても婚姻は成立しなかった。「父母の命」は文字の通り、親が結婚を取決め、子はそれに従うのである。「媒氏の言」というのは、媒氏の承認が必要である、ということである。周代には媒氏の官という官職があった。

結婚が「父母の命、媒氏の言」を必須とする以上、男女の自由婚姻はなくなる。婚姻は、個人の思慕の結果ではなく、家と家、あるいは集団と集団をつなぐ社会的な契約であったため、媒酌の制度は、自由婚姻を防ぐ意味も担っていた。自由婚姻を防ぐには、男女を隔離する必要がある。未婚女性の外出規制などで男女が隔離されれば、未婚男女間の恋愛がなくなり、恋とは夫婦間の愛情を示すものになる。

また、夫婦間だけでなく、妓女との間での恋愛もあった。自由婚姻はもとより、未婚男女が自由に恋愛できる状況がほなかった時代に、妓女と恋が生じるのは当然のことであろう。ほかにも、正式な妓女ではないが、それに似た「胡姬」という女たちがいた。貿易が目的でやってきたペルシアやスリランカなどの商人を「胡商」といい、各国や民族の使者や代表を「胡客」という。彼らは漢民族ではないので、「父母の命、媒氏の言」に束縛されず、男女禁制でもなかった。そのために、漢民族と胡人との恋愛もあった。漢民族と異民族の交流は、ますます盛んになった。そんな中で登場したのが「胡姬」である。胡姬とは胡人の水商売の女で、妓女同様に、恋愛

の相手として詩に登場するようになったのである。

中国の伝統的な婚姻制度である「父母の命、媒氏の言」が、『聊齋志異』の異類婚姻譚の中で礼節の通りに行われているものはない。それは狐女が「父母の命、媒氏の言」という制約にとらわれないからである。制約外に位置する存在として、人間の代わりに狐が登場する。あくまで、『聊齋志異』の異類婚姻譚は人間の物語なのである。本当は人間の物語なのであるが、人間の女としてありのままに描くのを憚って、狐として描かれているのである。だが、狐女を完全に人間のように扱うことで、現実では叶わない自由婚姻を可能にし、また自由婚姻に対する憧れの念を暗喩しているのである。

まとめ

『聊齋志異』に見られる狐と人との異類婚姻譚は、現実世界では実現できないものへの憧れを暗喩的に表現したものである。その憧れとは、男女の自由婚姻である。婚姻というものは二つの家を結ぶ契約であり、子孫をのこすための役割としての性格をもつものであった。いうなれば、「夫」や「妻」という役割を果たし、家を守るためのつながりであるという性格が強い。そのために、恋愛を経ず、お互い愛情のもとに夫婦となるという婚姻はなかった。

日本の昔話にも異類婚姻譚は数多く存在する。しかしそれらが憧れを暗喩しているとは読み取りにくい。それは、説話の中に恋愛の様子を描かれないこと、そして何よりも、正体露見に伴う男女の離別というモチーフが定着しているためである。その一方で、『聊齋志異』では、妻の正体が狐であることを理由に別れたりはしない。むしろ、ああ狐だったのかと納得することさえある。正体が知れよ

うと、変わらず愛情ある生活は続く。つまり、本来は一緒になれない者同士でも、夫婦生活が続行するのである。

しかし、現実世界ではそうはいかない。そもそも自由婚姻が認められていない。結婚し夫婦となるには「父母の命、媒氏の言」が必要なのである。だが、それは人間同士、特に漢民族の風習であるので、狐には適用されない。相手は人間ではないのだから、社会的制約を受けることなく夫婦になれるのだ。そのうえ、狐女たちの人間らしいこと、またそれが理想的であることも、人々の憧れの具現である。『聊齋志異』に登場する狐たちは、何らかの事情で狐の姿になつてしまったり、あるいは、自ら狐だと告白するほかは、人間と何ら変わりなく描かれているのである。それは、様々な制約があり、人間では描けないために狐で登場するからであつて、その本質は人間なのである。

注

(1) 童子試または童試ともいう。科挙の受験資格である国立学校の学生になるための試験。県試、府試、院試の三つの試験があり、すべてに合格すると秀才となり、入学資格が得られる。

(2) 科挙の制度で、予備試験に合格した者の中から選抜されて、首都の国子監に入学した者のこと。

(3) 李伯齊・車吉心主編『齊魯聞人』（山東友誼書社〈中国〉・1990年）

(4) 『聊齋』中描写男女婚恋的篇章、最為深動人、取得較高芸術。小説大多写人与女性狐鬼花妖之間生死不渝的爱情故事、构思奇特、而極富人情。這些篇章、贊美女性的德才、歌頌男女自媒自主的婚姻。這些男女、不受封建倫理道德的束縛、蔑棄礼教、憧憬着一種健康合理的愛情生活。从而对傳統的礼教觀念進行了大胆衝擊、表現出強烈的民主色彩。

(5) 竹田晃・黒田真美子『枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他』中国古典小説5ハ

唐代ⅡⅤ(明治書院・2006年)

(6) 中田祝夫『日本靈異記』新編日本古典文学全集10(小学館・1995年)による。

(7) 馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一『今昔物語集②』新編日本古典文学全集36(小学館・2000年)による。これ以降の引用も同書による。

(8) 略称と本来のタイトルの表記の関係は以下の通り。

【阿紫】…「阿紫」

【任氏】…「任氏伝」

【嬌娜】…「嬌娜」

【青鳳】…「青鳳」

【靈異】…「狐為妻令生子縁第二」

【今昔】…「備中国加陽良藤為狐夫得観音助語第十七」

(9) 小澤俊夫編『日本昔話のイメージ』白百合女子大学児童文化研究センター叢書(古今社・1998年)に収録。

受贈雑誌(十)

文教大学国文

文教大学国語研究室

文芸研究

東北大学文学部国文学研究室日本文芸研究会

文芸と批評

文芸と批評の会

文芸論叢

大谷大学文芸学会

文研論集

専修大学大学院学友会

文林

神戸松蔭女子学院大学神戸松蔭女子学院短期大学学術研究会

平安朝文学研究

早稲田大学平安朝文学研究会

別府大学国語国文学

別府大学国語国文学会

法政文芸

法政大学国文学会

待兼山論叢

大阪大学文学会

三重大学日本語学文学

三重大学人文学部日本語日本文学研究室

三田国文

慶應義塾大学三田国文の会

武庫川国文

武庫川女子大学国文学会

百舌鳥国文

大阪府立大学日本言語文化学会

野州国文学

国学院大学栃木短期大学国文学会

横浜国大國語研究

横浜国立大学国語国文学会

横光利一研究

横光利一文学会